



# 探偵小説 化粧の履歴書



目次

- 1、 リストラ
- 2、 夢と現実

ken

### 探偵小説・化粧の履歴書

#### 目次

- 1、リストラ
- 2、夢と現実
- 3、別人は演技
- 4、わたしを評価して！
- 5、目覚めた才能
- 6、運命の破綻

#### 登場人物

白鳥サチ 22歳

テレビコメンテーター 性格の二面性を解説。女性

テレビアナウンサー 女性

ハローワークの窓口 超老人風の男性

前勤務先の人事担当者 大学新卒の男性

ツイッター アドバイスをする不思議な老女

編集部長 勤務先の上司。男性

三田京子 私立探偵・人事調査員

#### あらすじ

「リストラで退職した22歳の白鳥サチ。自分の性格を変えることにした。不思議な老女のアドバイスは主演女優と同じ色の口紅をつけ演技を真似ること。それを実行し工夫した履歴書を出版社に提出。就職は成功。そこで数々の実績をあげる。自信がついたサチはスキルアップで大手出版社に応募。確実に採用と思ったとき——運命は破綻した」

#### 1、リストラ

無職——白鳥サチ——22歳の失業者。

同じ言葉が何度も交差する。ショックで昨夜は眠れなかった。ようやく起きて遅い朝食の用意を始めたがテレビの音量は極端に小さくしている。外部に音が漏れないように注意をしていた。

テレビでは女性コメンテーターが性格について熱心に解説している。

「性格には二つの特質があります。他人から見ますと、対面する相手から見えてくる性格と、隠れている性格」

ワンルームのアパートに一人で住んでいるが、いま、部屋にいることを外部の誰にも知られなくなかった。平日に閉じこもっている自分。今までに味わったことの無い屈辱。惨めな現実を漂流していた。

N女子大学短期大学部国文科を卒業して採用され2年が過ぎた。仕事に慣れた時期に解雇の

通告。悪夢は昨日である。知らなかったが正社員ではなく契約社員と言われ、だまされたことに怒りと惨めさが瞬時に同居した。

昨日より怒りは小さくなっているが……しかし、惨めな気持ちは変わらない。涙が溢れて止まることはなかった。涙は不安と孤独を連れてくる。運が悪い自分。大声を出すと全ての不幸が一瞬にして消え去ればいい。そう願った。

テレビに映る、お洒落なコメンテーターとアナウンサー。会話は続いている。

「今度は、自分から自分を見たとき、他人に見せている性格と、隠している性格があります。二面性があるわけですね。この二面性をどのように利用するか。それを入れ替えることで人生は変わりますね」

サチは内向的な性格だろうと、ずうっと前から思っていた。対面販売の職種は向かない。営業部門はもちろん、交渉をとまなう事務系の仕事も不向きと自己分析をして探した就職先。選んだのはコールセンターの人材会社である。テレフォンオペレーター。電話での対応。中途採用の求人広告を見ると経験2年以上になっている。未経験のサチが採用されたのは新卒で年齢が若いことが理由だったのか。そこに、自立意識が高いといった個性は考慮されていない。

2年が過ぎるころ、強く緊張すると声が上ずってしまう欠点を完璧に制御する。これで、自分はベテランに。そう信じたから夜のレストランで楽しく祝杯をあげたのである。夜景と重なった窓ガラスに映るサチ。もう一人の自分と心で楽しく会話をしながら――。

夢と現実の落差は大きい。常駐していた大手インターネット会社の都合で解雇されたのである。

テレビから会話が聞こえていた。

「性格の二面性。それぞれの良いところをドッキングさせて再構築すれば、今までと違った自分になります。就職活動で履歴書の書き方も変わるでしょうね」

「すべてが入れ替わると――ドラスチックに！」

「そうですねえ……別人になるかしら」

と、コメンテーターは応じた。

昨夜、コンビニで買ったミニ弁当は冷えている。真夏だから食中毒に注意をして小型の冷蔵庫に入れていた。電子レンジで暖めればいいが電気代は節約しなければならない。電気を停めようか。失業中だから……。

放心状態になっているサチ。食べ物の味は分からない。今、何をしているのか、時間の流れも無関心になっていた。テレビから流れる会話は次第に身体を通過していく。しかし隠れた別の性格が、その言葉を少しも洩らさず、しっかりと捉えていた。

## 2、夢と現実

解雇から二日が過ぎて、なんとなく精神が安定したような気がする。普通に呼吸ができる。昨日は気力を振り絞ってハローワークに行った。収入源を見つけなければならない。雇用保険の手続きをすませ求職カードに希望する職種を記入した。希望職種は一般事務としたが、今のところ、それしか思いあたらない。

ハローワークの担当者は意外なことを言う。

「恵まれていますね」

と、超老人風に見える男性職員は笑顔で言ったが、その意味は分からない。

「契約社員といっても、正社員と同じ身分です。もしかしたら、人事担当者の説明を聞き違えたのでは」

勤めていた会社は、社員にとって、良い会社だと思っているのだろうか。ほかの会社は予告手当を出さないためスムーズに手続きが進まないと言ったが、これも、今のサチには理解できなかった。ブラック企業と同じと思っている。

「白鳥さんは自立意識が高い。しっかりしている。すぐに就職先は見つかるでしょう」

と、付け加えた。たぶん、クビになった若い女性を励ます言葉なのだろう。マニュアル通りに言ったのだと思った。しかし、今は深刻な状況におかれている。気休めの言葉は——いらない！

ハローワークを出ると区役所に向かった。国民健康保険と国民年金保険に加入するため手続きをとった。やるべきことは確実に終わらせる。

今日は朝早くからパソコンと向かい合っていた。予定表が机の上にある。激しく動揺しながら昨日に書いたメモのようなもの。

- 1、復しゅう
- 2、公的な手続きの終了
- 3、新聞の解約
- 4、インターネットの解約
- 5、電気、ガスの停止

1の復讐は漢字を忘れたので、ひらかなで書いていた。今、見ると笑ってしまうが、昨日は、本当に復讐すると決めたのだ。

復讐の相手は、解雇を告げた同じ年齢の男性である。4年制の大学を出て、今年、新卒で採用された。だから社会経験は無い。

「性格が暗いですね」

未熟なのに生意気な口調で余計なことを言った。人事部長なら受けたキズは、まだ小さい。それがデリカシーの全くない新人に言われたのだ。性格を変えろと——

復讐する。でも延期しよう。いつでもできる。

（待っている！）

と、内心、汚い言葉を相手に叩きつけながら順位を5番目に下げた。

2と3は終了している。4は中止。就職活動で利用しなければならない。それに、陸の孤島になる恐れがあった。

ハローワークの担当者が恵まれていると言ったのは、解雇予告手当が出て雇用保険がすぐに適用される会社都合扱いになっているからだ。しかし——

「クビだぞ。精神的な苦痛が大きいぞ」

数日が過ぎた。今日も朝早くから性格分析についてインターネットで答えを検索している。性格が暗いと言ったデリカシーの無い未熟な新人に復讐するには、まず、自分を強くすること。強

くするために性格を変えることに決めた。そして経験者として応募し、再度、入社する。進化した自分を見せることが復讐の一步と決めた。

多くのサイトの中で、エニアグラムに興味がそそられる。人には9つのタイプがあって、すべては、いずれかに当てはまるようだ。すごいのは、その歴史は古く、およそ2000年前に考えられ門外不出の秘法と書いてある。

「へえ……秘法なんだ」

吸い寄せられる説明にディスプレイの文字と会話をしながらスクロールしていく。

タイプ1：いつも理想に向かって努力する。

「……理想ってあるの？」

タイプ2：困っている人がいると、近くに行って手を貸そうとする。

「わたしが困っているのだ」

タイプ3：成功することが最も好きで、成功のために手段を選びません。

「だれだって成功したいと思っているのだよ。それに、選ぶほど手段はありません。資格もないしさ……簿記3級」

タイプ4：ユニークで創造的かつ独創的。何よりも感動を大切にします。

「感動したいなあ……お洒落をしたいなあ……」

タイプ5：物事をじっくりと考え、データを集め、慎重に行動します。

「あのね、そんな余裕はないのよ」

タイプ6：真面目、誠実であることを大切に、周りと仲良くしたいという気持ちを人一倍強く持っています。

「2000年の歴史のわりには無理解。解雇されたのよ！ 誠実でも無収入になるのよ。クビの意味、分かっているのか——？」

タイプ7：人生を楽しく、明るく過ごしたいという人です。

「当たり前でしょ！ でもねえ、ガスは停止でしょ。電気は節約。だから暗いのです」

タイプ8：自己主張が強く、何事にも第一人者であることを志向します。

「ないない。ムリムリ。無駄な努力よ2000年さん」

タイプ9：落ち着きがあり、ゆったりとしていた安定感があります。

「安定感、まったくありません。不安の毎日・毎時間・毎分・毎秒……」

読み終わって、その他の性格は無いのかと思ったが。しばらくして奇妙な声が聞こえた。聞こえたというより、心に響いたといったほうが当たっている。

—いいとこ取り！—

### 3、別人は演技

個人の特性を分割した9つのタイプ。その良い部分だけを集めたら、どうなるのだろうか。自分の極端な希望を入れて順番に並べてみる。

タイプ1の理想に向かい、次は困っている人に有料で手を貸しながら、成功のためには手段を選ばない。創造的かつ独創的に、物事はじっくりと考え、みせかけでも周りと仲良くしつつ、人

生を楽しみながら第一人者であることを志向する安定感のあるタイプを目指す。

「ワオ～。すごく理想的な人間になりそう。でも、なんとなく自己中心的でデーモンみたいな人間に変身するな～」

サチはため息をついた。負けそうだ。しかし、しばらくして、  
「よ～し、デーモンになるぞ。デーモンに脱皮だ」

また、インターネットで検索する。ヒントが見つかるかもしれない。プロバイダーの解約をしなくて良かったと思った。持っている携帯電話は旧式なので接続できない。

ツイッター検索で探してみる。性格を変えたいと入れた。すぐに並んで出てくる。しかし参考になるような内容は見当たらない。他のサイトに誘導するような怪しいものばかりが目につく。期待はしていなかったがガッカリである。

30分ほど探していると、すこし風変わりなサイトが見つかった。『性格は化粧と同じ』といった内容である。サチは書き込みをした。化粧の仕方は？ そう書き込みをしたがツイッターは続かない。サチは具体的に書くことにした。

「22歳女性、内向的で消極的な自分の性格を変えたい」

そう書いたが反応は無い。あきらめることにした。ほかに、やることがある。

また、履歴書を書き始めた。すでに会社に送付している。ネットでの応募と手書きの履歴書を含めると11通になる。履歴書は書店や文房具店で購入しなかった。コンビニで無料配布しているタウンワークの履歴書を使用した。履歴書の切り取り線をカッターナイフで丁寧に切り取っている。

かなり長い時間、パソコンに向かっていた。暑い。部屋の窓は開けているが風は入ってこない。扇風機は回っているが弱々しく迫力は無かった。やはり夏は暑い。

汗で履歴書が汚れるような気がする。シャワーを浴びよう。ただ、最近になって気がついたがガスを解約したので風呂は沸かない。水風呂。困ったものだった。しかし、就職先が決まるまで、このままの根性で突き進むと自分を激励した。

水シャワーを浴びてから、またパソコンの前に向かう。ツイッターをクリック。とたんに歓喜の声が飛び出た。書き込みがある！

「あら、めずらしいですね。書き込みがございましたか。おやおや22歳の女性。それでは90歳を超えた女性からヒントをあげましょうね」

「答えは、主演女優になること。そう、世の中はドラマですよ。すべてが演技。ですから街の書店で月刊ドラマを購入しましょう。そこにシナリオが掲載されてキャストが並んでいるわ。主人公の女優の演技を真似るの。名女優の役になりきるの。演技きるのよ」

「わかる？ 攻めの演技で足跡を残すの。ポイントは二つ。同じ色の口紅を使うこと。何事も化粧よ。でも、TPOは守るのね。時（time）、所（place）、場合（occasion）に応じて使い分けることが大事」

「そして二つ目はh i p s。お尻のこと。神経を集中してね。全ての人たちに見られているわよ。それから本を買うときはネットで購入してはダメ。書店で店員さんを観察しながら注文して。会話、セリフ。これはドラマに大事なこと。ドラマの最後は【END】ね。すばらしいENDマ

ークをつけてね」

「これから自叙伝を出版するので超多忙。青春の真っ只中。青春に年齢は関係ないわ。青春というのは自分を磨くことなの！ サミエル・ウルマン（S a m u e l U l l m a n n）の青春の詩を読むといいわよ。では、書き込みはこれで終わり。【END】」

連続して書かれた文字を何度も読み返す。何かが、起こりそうな予感をしながら、なめるように追いつけるサチ。

一週間は、あっという間に過ぎた。会社に勤めていたときよりも動き回った。まず月刊ドラマを書店に購入予約。2日後に届いた。若い男性の書店員から月刊ドラマを手にするとき、しっかりと会話をしている。少し羨望の表情を浮かべたのを見逃さなかった。サチは一瞬、優越感を味わったのは事実である。おそらく履歴書を買うときは、このような快感は味わえないと思った。

等身大の鏡を購入する。月刊ドラマに掲載された主人公のエッセイに触発されたのだ。憧れの若い女優は等身大の鏡の前で演技を練習すると書いてあった。早速、近くのリサイクルショップで探す。高価なものが並んでいたが1台だけ安い鏡があった。男性店員に聞くと、裏側に破損があって他より大幅に値段を下げたと言った。さらに値引きをすると言う。なんとなく同情して購入。

「鏡の裏なのに……ちょっとしたキズなのに」

価値とは、そのようなものかと初めて知った。キズであっても鏡としての機能は全く変わらない。それが極端に価格が下がることに興味がわいた。興味といえばネット小説がある。

履歴書の書き方を検索したとき、『すり替えた履歴書』のタイトルが出てきた。

探偵小説・すり替えた履歴書

<https://kakuyomu.jp/works/1177354054880418188> 経歴の良い他人の履歴書を使って人物が入れ替わる小説。目的の会社に応募すると役員候補として採用され出世していく。読み終わったとき、サチの脳裏を複雑なものが渦巻いた。多くの会社——20社以上——に応募しても面接まで進まない原因が、ようやく理解したのである。履歴書も化粧をしたほうが良いのだろうか？

その小説で興味があったのは、生年月日で2種類の人間に分類すること。生まれた月で性格が見えてくるらしい。女性であれば、生まれた月が奇数であれば社交性があり何事も気にしない。販売部門に向いている。偶数月は疑り深く引きずる傾向はあるが几帳面なので事務系に向いている。そのように人事調査員の主人公は分類していた。何千という履歴書から判断したようである。男性は、女性と反対になると28歳の女性調査員は分析していた。サチは1月31日生まれ。

「ボーダーラインだな」

と、思ったが悪い気はしない。両方を兼ね備えているような気がする。お得な性格かも。

2週間が過ぎて、すべてが変わった。送付した手書きの履歴書が反応したのである。

「面接通知がきた！」

思わず声を出したのは当然である。ドラマの主人公のように行動すると決め等身大の鏡の前で

リハーサルを続けていた。鏡の裏にキズがあっても全く気にしない。

#### 4、わたしを評価して！

11月。株式会社お茶の水出版に採用されて2カ月が過ぎた。

「白鳥さん、名刺ができました。使ってください」

自分の席で仕事をしていると、すこし神経質そうだが人当りの良い編集部長が近づいて、手に持った小さいブルーの箱を机の上に置いた。

「試用期間は終了でしょうか？」

「最初から、正社員ですよ。面接では仕事に取り組む姿勢に熱意を感じたからね」

サチは綺麗な姿勢で立ち上がると編集部長に頭を下げた。

「ありがとうございます」

名刺の箱を開けて中を確認する。

株式会社お茶の水出版

編集部特販課 白鳥サチ

「——！」

全身を瞬時に電流が走った。身体の末端に重大な情報を正確に伝える。それは快い痛みを伴っていた。

「編集の補助スタッフで採用しましたが、2ヶ月間で編集ソフトもマスターしたようですので、希望の営業部門を兼務してください。特販課という部署はありませんが、白鳥さんのためにつくりました。ですので、課長兼平社員ですね」

そう言って部長は笑った。サチの履歴書の自己PR欄は、次のように書いている。それを見て編集部長は面接通知を出したのである。

『細かいことに気を配り、自ら進んで実行することです。出版社のアルバイトでは書籍の在庫管理業務を手伝い、正社員の指示にしたがって取り組み、間違いが無いため感謝されました。座右の銘は反省と工夫です。反省は過去を総括し、工夫は未来に向かって努力することだと自分に言い聞かせております』。履歴書も化粧をした。

特販課というのは、サチが面接のときにアイデアを出したからである。自叙伝の出版企画を提案した。ヒントはツイッターで知った90歳を超える女性の近況である。インターネットで検索すると企業年鑑が見つかった。図書館に常備していた。実際に見ると9センチメートル以上もある分厚い出版物で、大手の企業から中小企業まで載っている。会社の履歴書のようなもの。そこから会長と株主が同じで創業が古く従業員数200名以下のオーナー企業を選んだ。150社を選びエクセルで一覧表を作ったのである。作成したデータを提出したとき、

「配当金の出ている会社が、いいでしょう」

と、編集部長からアドバイスされた。潤沢な資金を持っている富裕層だからと、付け加えている。

すでに、ダイレクトメールを会社宛に発送していた。名刺ができたのは反応があったからだ。5社から電話で問い合わせがあり、そのうちの2社は感触が良かったのである。試用期間が終わる



前に行動したサチ。上司は驚いたが、一番、驚いたのはサチ自身である。

就職のハウツー物は参考にならない。面接では個性を出すように指導しているが、それは明らかにウソだ。

本来、自分に備わった特質を個性というなら、これから就職する組織の中で活動はできない。個性とは、就職した会社に適合する技術とサチは考えた。さらに言えば、ドラマに登場する主人公に成りきることが個性なのだ。そう定義した。

## 5、目覚めた才能

武内理化学工業株式会社の創業者は来年、90歳になる。第一線から退いているが大株主である。従業員数146名。理化学機器の卸販売業で仕入先は一部上場のメーカー。販売先は大学病院や製薬会社。会社の業績は安定している。

編集部長がアドバイスをした配当金を出していた。一口で言うと、お金持ち。現在の社長は創業者と同じ姓であるが娘婿である。自叙伝の出版は娘婿である社長の意思が強い。

サチは自信を持って創業者と社長に企画の販売を行った。結果は大成功である。

予定外のことは書籍の内容だった。自叙伝なのだから自分のことを書くと思っていたが、亡くなった愛犬が多く登場する。さらに、創業当事は事業として動物実験をしていたことからマウスなどの写真も入れていた。その結果、自叙伝のメインタイトルは『感謝』。環境も含め感謝の気持ちを込めている。従業員に無償配布された。一冊の価格は1万円。200部の受注。全額、前金である。もちろん、途中から社長と編集部長が参加した。

サチは急速に自信をつける。憧れの女優と同じ口紅をつけて演技をすると、いろいろな難しいことがクリアするような気がした。分からないことは自信を持って聞く。恥ずかしいことではない。

新企画を提案。一般の書店を通した書籍の企画。タイトルは「わたし・変えます!」。この企画は採用された。著者候補を探し原稿を依頼する。これも成功した。すべてが、うまく行くサチ。ついに運命を変えた。

見えない力で操られている運命は信じないことにする。運命とは未来。時の先を選択すること。そこには常に、二つの選択しか存在しない。どちらを選ぶか。それは自分が決めること。一瞬の選択が人生の全てを変えてしまうことがあるが、それは今。チャンスを掴むとは、そのようなこと。運命を変えるのは単純なことだ。

サチは転職を決意する。好きなテレビドラマの主人公が転職するからだ。自分を高く売り込む。

「眠っていた才能が目覚めたのよ」

女優のセリフを自分に重ねた。もし、タイトルを付けるとすれば「目覚めた・わたし!」だろうか。

履歴書と職務経歴書を応募先の株式会社A出版社に提出する。職務経歴書には今までの実績を書き、さらに、自分の強みの欄には『豊富な企画があり、明るく活発で周囲と協調して行動し、誰とでも分け隔てなく接することができる。人と話すことは得意』と書いた。

面接が終わり内定を勝ち取る。運命を自分で切り開くことに成功したサチ。だが参考にした探偵小説のことは忘れていた。「すり替えた履歴書」に登場する人事調査員の存在である。

株式会社A出版社の依頼で調査を担当した私立探偵で人事調査員の三田京子。サチのアパートで偶然に奇妙な郵便物を発見した。

## 6、運命の破綻

N女子大学短期大学部同窓会から送られてきた郵便物。履歴書には4年制のN女子大学を卒業と記載している。三田京子は調査員の経験から学歴詐称の臭いをかいだ。もちろん職歴詐称も。そして、その延長に潜むのは危険な「複合人格」である。

追跡調査をしたところ事実が判明した。調査報告書の判定は「C判定（支障あり）」。当然だが不採用である。

運命の破綻に気づかないサチは勝利に浸っていた。株式会社A出版社の合格には自信がある。株式会社お茶の水出版は、すでに退職届を出した。慰留されたがスキルアップを退職理由にしたとき、編集部長は慰留を断念したのである。

自慢の唇に新しい口紅をつけながら陶醉し、新しい女優の演技を完璧に真似る。別人になる鏡に映る自分。主人公の相手に何度も勝利の微笑みを重ねながら見入っていたが……。

【END】

「えっ、不採用！？ ちょっと待ってください。確かに学歴や職歴の現実には食い違いはありますが、履歴書を化粧しただけ——わずかな化粧——ですよ。わたしを見てください。人物を見てから決めてください。就職するのは履歴書ではなく、わたしですから。わたしです！」

サチは鏡と対面しながら何度も叫んだ。そして内心、ENDマークはつけないと宣言した。成功の続編がある。だから——【つづく】

サチは投資を勉強して、投資でお金をためることを考えた。個人事業主として成功することを誓った。